

森里海「今」から「未来」へ

さまざまな視点から対馬の「今」にスポットを当て、対馬の「再興」を「再考」していく新コーナー。初回の今月は、対馬の「森」「里」「海」それぞれの分野で活躍されている皆さんと財部市長との対談から、「未来の対馬」へ繋がる道を探っていきます。



対談者：古藤好郎さん・篠田良治さん・吉副美千代さん・財部能成市長
聞き手：阿比留えり子（広報リポーター）

豊かさを持って暮らしてきた

古藤さんは諫早から「ターニン」されたということですが？

古藤 諫早農業高校の恩師の紹介で20歳の時に林業の家庭に養子に。昭和50年頃までは山の景気が良く、養父は戦後30年間、たくさんあった80年生の木を売って生活に充てていました。ところが次第に山の景気が悪くなり、現金収入を求めて椎茸の栽培を始め、多いときには1500kgくらい出荷したこともありました。私は今までに杉やヒノキを約6万本植林しましたが、これらの木は人間と同じで手入れしないと立派に育ちません。周囲では林業を辞めて離農する人が多くなっていましたが、私は植えた木が何だか可哀相で辞められませんでした。どうにか現金収入の職を探しながら、暇があれば山に入って木の手入れに明け暮れる生活でした。人から見れば、収入も少なく惨めと思われるかもしれませんが、自分では豊かさを持って一所懸命暮らしていたつもりです。

最近山に対する支援事業も行われ、山を手入れすることで収入にもなり、山もきれいになります。10年先には山の景気も出るという話もありますから、これを機に山を立派にして自立の道を目指したいです。

「山を守る」とは？

古藤 山は個人の財産ですが、最近では環境問題の点から国民的財産という捉え方をされるようになってきます。環境税も投入される山の景観整備や手入れもされてきましたが、若い労力が足りず、手入れの必要な山はまだたくさんあります。山は手入れすることで活力が戻ります。山が荒れて酸性土壌になると、養分の少ない川の水が海に流れて漁業にも関係してきますから、私は山を元気にするためにみんなに呼びかけたいです。

私たちは数人のグループで山の一角を「100年の森作りをしよう」と活動しています。山も人間も元気になる森にしていきたいです。



古藤好郎さん(67)

諫早市出身。林業農家の養子となるため対馬へ。椎茸栽培・炭焼きのほか、舟志の森づくりに関わる。

やっぱり海が好きだから

古藤さんのお話の中に山と海の関係がありました。篠田さんは最近意識されることがありますか？

篠田 雨が降ると植物プランクトンが川から海へ流れ、それを動物プランクトンが食べ、それを小魚が食べる。岸のほうに寄せてくる。またそれを捕食する魚も寄ってくるという仕組みなんです。雨が少ないと水も流れませんが、餌がなく、魚は岸に寄せずに沖へ行ってしまふんです。沖へ漁に向かえば労力も燃料も必要になる。僕らが食べる魚が近くで獲れなくなったら、食卓に魚がなくなつてきます。そう考えると、やはり山からの栄養分というのは大事ですから、森を大切にしないといけない。森の役割は本当に大きいです。



篠田 良治さん(38)

サラリーマンを経て漁師に。対馬市漁協青年部連絡協議会会長を務める。

以前は国民宿舎上対馬荘のフロント係をされていたと伺いましたが。

篠田 実家の祖父が漁師でした。小さい頃から沖に連れて行ってもらって漁に携わっていましたが魚釣り大好きになって。いつかいい機会があったら転職したいと思いつても、今からの漁師は生活が厳しいと周囲からの声もありました。それでもやっぱり僕は海が好きだからどうしても諦められなくて、8年前に思い切って転職しました。

磯焼けや魚の減少、燃料の高騰など心配な声を多く聞きますが、実際漁師になつての現状はいかがですか？

篠田 今一番頭が痛いのは燃料の高騰です。燃料が値上がりすれば沖に出られなくなります。高い燃料代を消費してコストがかかっただうえに獲れた魚の単価が安くては利益が出ませんから、漁師を辞める人が増えるのではないかと心配です。

そのあたりの打開策の一つとして昨年「海洋保護区フォーラム」も開催されましたが、参加されていかがでしたか？

篠田 僕らも頭の中では考えていていましたが、活動の主体となる漁協青年部も小さく、また県レベルの話し合いとなると、まき網や底引き網漁船の問題や各県の漁の形態や道

具の違いなどもあり、話をまとめるのが難しかった。でも、資源が枯渇している今、自分たちの水揚げを犠牲にしても次の世代に残してやらなといけません。ルール作りは大事だと考えます。海洋保護区に関しては今も勉強している状態ですが、現在アマダイの禁漁区を漁業者で設けて、月に2回は指定区域に入らない取り決めをしています。

まき網船などが対馬に集まるのは、やっぱりここに魚が一番多くいるからなんです。多くのまき網船がこっそり獲つてしまつたら、僕らの獲る分は全くない。対馬だけでなく全体が資源を守ると同じ方向性で進まないといけないです。漁業者の意識を上げ、若い力を全面的に盛り上げて、市と一緒に県や国に活動していったほうが良いと思います。

EMの「とりこ」です

吉副さんとEMの出会いには？

吉副 私は生ごみをコンポストで処理して畑に戻すことを20年来続けていましたが、悪臭に悩まされており、すぐる思いでEM講習会を受講しました。早速作って使ってみると、生ごみの臭いがほとんどしなくなり、とりこになりました。上対馬町で生ごみリサイクルの推進メンバーにな

り活動していたところEMの無料配布も始まり、インスタクター養成講座も受講しEM普及推進員として活動を始めました。メンバーで実践したことを組み込んだ資料を作ったり、地区でのEM講習会の開催をお願いして回ったりして、約30ヶ所に講習に伺いました。学校や幼稚園ではEMだんご作りを体験してもらって川に投入したり、豊地区の漁業組長さんが賛同してくださって磯焼け解消の活動としてEMだんごを海に投入したりもしました。

水の汚染源の上位には洗剤だけでなく米のとぎ汁も挙げられます。とぎ汁でEMを培養して流せば水の浄化になるだけでなく、お掃除などに使えて便利です。EMはみんなですつと使い続けていく必要がありますから、継続して普及の働きかけが必要だと思います。

皆さんから心強い意見をいただきましたが、市長はどのように思われましたか？

市長 私たちにとって財産である対馬を未来にどのように渡すのかを「森」「里」「海」それぞれの立場から考えると、今自分が出来ることをみんなが同じ方向で一所懸命に取り組んでいくことが大切だと考えています。古藤さんはずっと林業を中心にいろんな仕事をしながら生活して



吉副美千代さん(65)
EM普及推進員として幅広い年齢層にEM活用方を指導している。

こられた。生活は惨めではなかった。「豊かだった」とおっしゃった。私はその価値観だと思っんですよね。私たちはかたくなに私たちの生き方を作り上げていくんだということが大切になる時期がすぐそこに来ていのだろうと思っています。

EMに関しては、それを通して市民の意識が里から海、農業にも繋がってほしいです。今年度から上対馬町と上県町で、有用微生物を使用した土壌の改良をして作物を作ってもらおう試みを始めています。また、子供たちの給食に対馬の食材をどんどん使ってもらおうと思っています。子供たちがいつか「食」で帰ってくるように本当の食を味わってほしい。

林業に関しては、これから様々な制度が導入されると思います。バイ

オマス発電に移行していく時に、間伐との関連が出てくる。日本はこの10〜20年の間に変わっていくと思うんです。だからこそ、安く売れないけれど今ずっと耐えてきてくださっている方たちが感謝される時代が来ると思っています。

海の問題ですが、対馬東方で1500平方キロメートルほどをアマダイの禁漁区にされている。対馬の面積が700平方キロメートルですから倍以上の面積です。私の考える海洋保護区というのは、資源管理型漁業をどう進めていくかということとです。漁業者が自分たちを規制していく、「あるから獲るのではなく、あるけど獲らない」という自制する気持ちが必要認識になれば、対馬は未来永劫生きていける。一朝一夕に出来るとは思っていませんが、私は特にこの1年が国に打ち出す勝負の年だと思っています。対馬における資源管理のあり方という視点で、漁業者だけでなく「森」「里」も一緒になった対馬版海洋保護区を打ち出していけば、というストーリーを描いています。

私はいつも「心は縄文時代に帰るうや」と思っています。経済活動はそうもいかないうところはありますが、心はそのようにありたいものです。

市長から「自分のできることをやっつけていこうよ」という話がありました。

古藤 山に関わる仕事を終の仕事に、山に貢献したいというそればかりです。環境のことを言えば経済が小さくなるのかも知れませんが、これから先はそれが求められるのではないかと思います。舟志の自然学校にも少し関わっているのですが、関東方面から来られた方が対馬の自然は本当に素晴らしいと言ってくたさる。都会にも山はたくさんあるでしょうが、本当の自然が対馬にはある。それが対馬の取り柄だと思います。またそれに必要最小限の手を加えて、他にない対馬らしさを作っていくから、癒しの場所としても対馬が伸びるのではないかと思います。便利さも必要でしょうが不必要な開発はしないよう、自然を残してほしいと思います。

炭焼き体験や山歩き、椎茸の菌打ち体験などされた人たちが楽しんで生き生きしていらつしやるのを見て、今後このような事業があれば惜しみなく協力したいと思っています。

篠田さんは、山と里と海が繋がることの必要性が今一番大事だと感じていらつしやるのではないかと思います。

篠田 自然の仕組みを知るとい

ことが大事だと思えますが、今までその機会が見過ごされてきました。食物連鎖が整わないと魚は獲れないので、EMで川をきれいにすることも、山を整備して土壌を豊かにしプランクトンが流れるようにすることも、山と里と協力し合ってやっっていくことが必要だと思えます。

吉副さんも、EMと出会うって環境に関する考え方が変わったということがありますか？

吉副 磯でとこぶしなどを採った経験がありますが、最近はその姿が見えなくなつたように思います。どうぞ一人でも多くEMを使って流して、自然環境に役立ててほしいと思います。今私たちがEM作りの場所、生ごみ堆肥から野菜作りの場所、EM全体の活動拠点の場所になればと小規模ですが市民農園を計画しています。生ごみ減量化のためにもEMば



かしてチャレンジしてみてもいいかがでしょうか？ただ、畑のない方のために各家庭で作った生ごみのほかし漬けを収集する方法を考えていただけないでしょうか？

現在、市では環境基本条例なども進めています。

市長 条例というのは、私たちの方向性や理念を打ち出し、市民が同じ方向に向かっていく表明のようなもの。皆さんがどんどん活動して、市はどんどん支援していこうと思っています。

篠田さん、古藤さんのお話に共通するのが、自分たちがどういう食物連鎖のピラミッドの頂点にいるのかさえも分からないで食べているということ。例えば海から川や森の問題を考えていけば、森の作り方にも有機農業にも繋がっていくと思います。吉副さんのお話にありましたが、今年度から始まった市民農園も、皆さんに見て、知ってもらいながら広げていかなければという思いです。昨年度は試験的に敵原町と美津島町の各30軒、計60軒に協力してもらい、バケツに作ったばかし漬けを集めて箕形地区で発酵させています。これを継続していくとどれだけ焼却場の燃料代が軽減されるかを試算したいと思います。油代が下がればその分収集費用に回せますし、皆さんにと

っては税金である燃料代が減った分で畑が肥え、細胞が活性化された元気な作物ができ、子供たちが給食で食べるという流れが作れると良いと思っています。

今日の大きいテーマである森・里・海の連環について、みなさん個人の抱負などありましたらお願いします。

古藤 林業の立場から言いますと、やはり高齢化の問題があります。山の手入れをいたくても出来ない人から頼まれることがあります。個人では限界があります。行政で森林組合をバックアップしていただき、山の手入れを進めるための支援をしていただきたいと思っています。私も山の分野でこれからも頑張っていきたいです。

篠田 僕らは海洋保護区というのが念頭にありますから、みんなで協力して自分たちの子供たちに残せる海を作りたい。EMも山も大事にして、自分たちの環境を守ることが一番大事なことだと思います。

吉副 EMの冬場の便利な発酵方法は、ペットボトルをお風呂の湯の中に漬けておくことです。3日程度でガスが出てきてうまく発酵できま

り講習会に参加していただきたいです。

最後に、真の「環境王国 対馬」とは、ということと今日の座談会を締めたいだけですが。

市長 自分ひとりでは辛いけれど、他の分野の人たちも頑張っているという連携の気持ちを大切にしていかななくてはいいけない。足元だけでもいい、派手なことじゃなくても全員がし始めたなら素晴らしいものになると私は思っています。「自分たちがしていることは、自分たちのこの地では最もいい方法だ」とどこかで信念を持ちながらお互いがぶれずに歩いていく。そうすると自ずと誰がどこから見ても、「環境いいね」「大切にしているね」「だからあんなに人がニコニコしてるんだよね」といわれる島になっていくと思っています。お互いの分野で互いに手を握り合って歩めば、必ず良くなると信じています。古藤さんのはじめの言葉のように「私は惨めとは思わん、豊かかった」というのが対馬の価値だと思います。しっかりと自信を持って言えるような生き方を、みんなで求めていきたいですね。

皆様、本日は貴重なご意見をありがとうございました。

都会にはないものが

対馬にはある

現在、日本が追い求めてきた「豊かさ」の概念が大きく変わるうと思っています。

対馬に住む我々にとって、「対馬に無いもの」「都会でしかできないこと」への憧れは尽きませんが、「対馬にしか無いもの」「対馬でしかないこと」をもう一度探してみよう。

まだまだ「対馬って最高!」と言えるような「宝物」、私たちが見つけ出せていない対馬の「価値」が隠れているはずですよ。

「本当の豊かさ」を感じるフィールドは、ここ「対馬」なのかも知れません。

